

自分に合うバトンは、自分でつくる！

—用具の個別最適化×リレーの学習—

大阪教育大学 保健体育 鉄口 宗弘
 附属天王寺小学校 内堀 友寛

はじめに

現在までに小学校体育において、教具の工夫は様々な研究や実践が繰り返し行われてきた。その研究や実践は、「視覚的わかりやすさ」や「握りやすさ」などに配慮したものが中心であり、個々の児童を対象とした個別最適化の実践は限られている。また、近年注目される「個別最適化」の学びは、国語や算数といった教科では多くの実践が進んでいる一方、体育では主にICTを活用した動作分析やフィードバックにとどまる場合が多く、教具自体を個々に最適化する視点は十分に展開されていないのが現状である。すなわち体育科において児童一人ひとりの身体的特性や感覚に応じて教具を工夫・調整する「教具の個別最適化」を通して、子ども自身が自らの身体への気付きを深めるとともに、スポーツに対する興味・関与感を高める可能性を探ることは重要である。安価で身近な素材を用いた教具の工夫により、児童が自分の身体の特徴や使い方に意識を向け、自らに合った教具を選択・調整する過程も重視する必要がある、このプロセスを通して自己理解が促進されるとともに、運動への主体的な関与や身体活動の楽しさを実感することにつながると考える。よって本研究の目的は、小学校体育における「個別最適化」の新たな実践アプローチとして、教具の工夫を通じた児童の学びの可能性を検討することである。

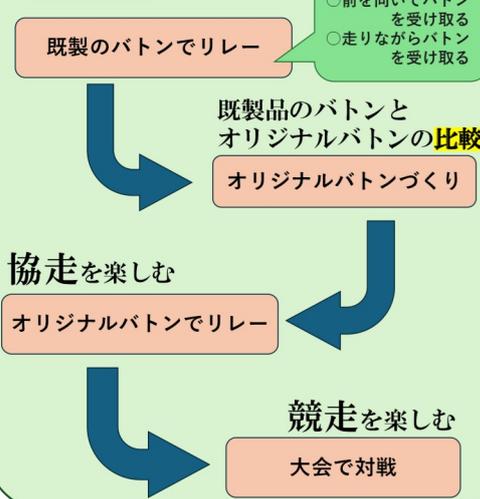
実践の概要

リレーの学習では、多くの場合、教師が準備した同じバトンを使って走り方やバトンパスの技術を身に付けていく。しかし、実際の子どもたちの走り方や手の大きさ、スピード、感じ方は一人ひとり異なる。にもかかわらず、用具は全員同一であることが多く、「自分に合った持ち方が分からない」「うまくパスできない」というつまづきが生まれやすい。そこで本単元では、子どもたち自身が「にぎりやすさ」「わたりやすさ」「走りやすさ」「やる気」の4つの観点からバトンの特徴に目を向け、自分に合う「オリジナルバトン」をつくる学びを取り入れた。道具づくりを通して、自分の体の使い方に気づいたり、ペアの走り方の違いを理解して渡すタイミングを調整したりするなど、用具と動きの関係を主体的に探る姿が見られた。さらに、バトンを比べて走ることで「長さや重さでスピードが変わる」「音があるとタイミングがとりやすい」など、多様な発見が生まれ、子どもたちは自ら改善点を考えて工夫を重ねていくこととなった。こうした学びの積み重ねは、記録を伸ばすだけでなく、仲間の動きを理解し合うコミュニケーションや、協力してリレーをつくり上げる意識の向上にもつながった。

学習活動

本実践は、小学校3年生が105名が対象。2人1組で50m直線リレーを行い、2人それぞれの25m走の記録の合計より短いタイムにすることをめざす。コースを直線にすることで、子どもたちの課題意識が「バトンパス」にフォーカスされることがねらいとする。

単元構成



オリジナルバトンづくり

実際にオリジナルバトンづくりの時間になると児童はそれぞれ思い思いのバトンをつくり始めた。児童がバトンに加えようとした工夫は以下のように整理することができた。(アイデアシートより)

工夫の視点	バトンの工夫・意図	体育科の学びとの関連
握りやすさ	細くする、グリップをつける、スポンジや輪ゴムを巻く	自分の手に合った形状をふまえて、バトンパスの精度を高めることで競争の仕方を工夫
すべりにくさ	すべり止めテープ 素材の選定(紙芯、プチプチ等)	バトンを落とさないようにすることで、リレーの記録向上をめざす課題解決の仕方を工夫
音による合図	すずやビーズを入れて近づいたことがわかる	バトンパスのタイミングを音で判断し、ペアでの連携を高める工夫
見た目・色分け	カラーテープや折り紙で装飾、持ち手の色分け	自分の持つ位置を明確にし、ペアでの役割分担を工夫することでスムーズにバトンを渡すための工夫
長さ・形状	長めにする、リング型にする、へこみをつける	自分の走り方や渡し方に合った形状を選ぶ工夫
気持ち	応援メッセージを貼る キラキラでテンションアップ	自分の課題(緊張・やる気)に対して、気持ちを高める工夫



材料のさわり心地や重さなどを確かめながら、つくる姿があった



2人組で確かめ合いながら、バトンづくりに挑戦!!

オリジナルバトンを使ってみた

授業がはじまる前から「早く使いたい」と話し、誰かに促されなくても、何度もバトンパスに挑戦し、バトンを改良する姿が見られた。子どもたちの授業の振り返りでは、「うまくいかなかった」「記録が伸びなかった」といった戸惑いが書かれていた。と同時に、「すごく楽しかった」「次はこうしてみたい」という前向きな言葉が綴られていた。これらは、「オリジナルバトンづくり」が、失敗や困難を経験しながらも自分で考えて挑戦しようとする姿につながっていると捉えられる。



児童のふりかえり

単元の終末に、児童が本単元の内容について振り返った内容を以下のように整理した。

- バトンパスの工夫と上達**
 - バトンを渡すタイミングや位置(1m手前で「ハイ」と声をかけるなど)を工夫することで、スムーズに渡せるようになった。
 - 手の出し方やバトンの持ち方(手を広げる、手のひらを上に向けるなど)を工夫して、受け取りやすくなった。
 - バトンの形や長さ、素材(細い・太い・長い・短い・滑りにくいなど)によって渡しやすさが変わることを体験した。
- チームワークの大切さ**
 - 相手と息を合わせるものの大切さを実感した。
 - 声をかけ合うことで、バトンパスがうまくいくことがわかった。
 - チームで協力することで、タイムが良くなったり、リレーを楽しんだりすることができた。
- 道具の工夫と観察**
 - オリジナルバトンを作る際に、滑り止めや長さ、太さなどを工夫して、使いやすいバトン考えた。
 - 他のチームの工夫を見て、自分たちのバトンや走り方に取り入れた。
- 記録の向上と達成感**
 - 練習を重ねることで、タイムが縮まったことに喜びを感じた。
 - 自分の成長や、チーム全体の上達を実感できた。
 - 次はもっと速くなりたい、家族より速く走りたいなど、次の目標をもつようになった。

このように、リレーの学習を通して、子どもたちは「技術の向上」「自己の成長」「協力することの大切さ」「工夫するおもしろさ」など、様々なことを学んでいることがわかる。

まとめ

何度も挑戦する姿が印象的だった。その原動力は子どもたちが自分で作ったオリジナルバトンだったように思う。児童の言葉にも表されていたが、**体育の学習で用いる用具がいかに関与者に影響をもたらすのかということについて考えられる単元になった**。一方で、リレーのタイムを計測する活動も取り入れたが、記録の差がごくわずかだったため、子どもたちが「バトンパスがうまくなった」という学習効果を実感するには十分な手立てとは言えなかったように思う。3年生という発達段階を踏まえると、「見える化」や「体感」を通して学習の成果を実感できるような方法を模索する必要があると感じた。今後も、本実践のように運動への取り組み方を多様なものへと広げつつ、子どもたちが主体的に運動に取り組みめるような実践をしていきたいと思う。

わかる
できる

創る

試す

楽しむ